



岡本真利子 議員
(政清会)

問 子どもの未来を守り育てる取組について

答 わずかな兆候や小さなきっかけを見逃さないことが重要

問 (1) 低出生体重児支援について
出生時の体重が2500グラム未満で生まれた赤ちゃんのことで子育て・成長を見守る過程でさまざまな問題を抱える中、行政はどのように支援していくのか伺う。

- ① 直近の低出生体重児数とその後の支援体制。
- ② リトルベビーハンドブックの導入に向けた動きについての認識。
- ③ 3歳児健康診査の視力検査について

強い屈折異常や斜視が見逃された場合に治療が遅れ十分な視力が得られないこともあり早期発見、早期治療が必要とあるが町の見解は、

- ① 3歳児健康診査の現状。
- ② 精密検査対象数と弱視に判断された数。
- ③ 夏休み明けの「子どものSOSを見逃さない」ための対応について

長期休業中は、児童生徒の生活が不規則になること、問題行動や不慮

の事故が発生しやすいこと、また新型コロナウイルス流行により学校生活に影響を受け2020年には小中学校の自殺者が過去最多となり、周囲の大人がSOSを見逃さないよう教員、保護者に対しての注意喚起について伺う。

町長

(1) ① 5年間で低出生体重児は62人、出生児数に占める割合は8.2%であった。低出生体重児の支援体制は、保健師による妊婦訪問や新生児訪問をはじめ、助産師による産後ケア事業において、個々の児に合わせた子育て方法や母親の悩みの解決が図られるよう、より親身になった支援を行っている。

(2) ② 新生児訪問や乳幼児健診時に不安や悩みの相談に応じるとともに、低出生体重児の保健指導マニュアルや参考文献、過去のデータや他自治体のリトルベビーハンドブックなども参考にしてアドバイスを行っている。現在、道においてもハンドブックの作成の検討をしているため、完成した際には活

用し、より母親の気持ちに寄り添った支援をする。

(2) ① 一次検査として、家庭において問診の記入と絵指標での視力検査を行い、二次検査の検査会場において記入内容と視力検査の結果を確認するほか、家庭で十分な検査ができなかった場合には再検査を行い、健診担当医師の診察を受けたうえで、精密検査が必要と判断された場合は専門医療機関を受診していただいている。

(2) ② 過去3年間で、健診受診者数541人のうち、精密検査が必要とされた児は25人で、弱視は1人。

教育長

(3) 7月の長期休業前に開催した校長会議において、自殺予防に向けた取組、児童虐待の防止対策、早期発見・早期対応、相談窓口の周知の3点について、児童生徒の実情に応じて適切に指導するなど、児童生徒の命と心を守る取組に万全を期するよう「夏季休業に向けての児童生徒の指導等について」の通知を行った。また、各保護者

に対しても、学級通信や北海道教育委員会広報誌「ほっとネット」などで、家庭内での見守りの促進や相談窓口等の周知を行った。

再質問

子どもの目の機能は6歳までにほぼ完成するといわれている中で、現在の検査方法でより精密な検査値であるのか危惧される。3歳児健診で目の異常を早期に見出すためには屈折検査機器での検査が必要ではないのか。

町長

現在、屈折検査機器の導入について検討している。本年度中に、機器操作等について保健師の研修を行うとともに、実際の3歳児健診の現場で指導等を受けるなど、導入の際に、スムーズに屈折検査が行えるよう準備を進める。

<検査の様子>

